

2019年度 認定留学 留学報告書

国際交流学科 3年

留学先：フィリピン シリマン大学

留学期間：2019年5月～2020年3月

私は学内外において周囲の人々の環境問題改善への意識向上に一番取り組んだ。フィリピンでは特にゴミ問題が深刻である。日常的にあらゆるところでゴミが散乱している様子やダンプサイトと呼ばれる大きなゴミ山を見て、現地のゴミ処理システムについて注意深く観察していた。そして留学中のメインテーマの一つを環境問題としていたため、どんな些細な疑問からでも問題意識を持ち、追究し続けた。学生が運営する環境団体に入り、友達と地域の人々と協力して地域でゴミの分別教育イベントを3回実施した。焼却炉がなく、ごみを燃やして処理することが違法とされているフィリピンでは、分別によって再利用できるゴミをフル活用することがゴミ増加問題を緩和できる一番の鍵となっている。しかし、多くの人がそれを軽視し、自分に関係のない問題と捉えていることから、なかなか分別もされず、ゴミが減らない。こうしたことから、「まずは身近な所からゴミの分別方法の理解度を上げよう」というテーマのもと、そのイベントを行った。その地域が1週間のゴミを大袋20個分溜め、参加者全員でそれを開封し分別作業を行うのだが、重要なのは分別方法を皆で理解し実践すること。リサイクルをしやすいするために、色付きのペットボトルやビニール袋は透明のものと分けて処分することなど細かいところまで伝えることができた。しかし作業は5時間もかかり、効率の悪さや、現地の日常的なごみ処理の様子からこれを継続的にやっていくのは厳しいのではないかと思っただが、メリットは思った以上に沢山あった。生活から出るゴミがどのようにリサイクルされ、売られるのかという裏側を地域社会が知る大きなきっかけとなり、その後、地域から排出されるゴミのうち3割が減ったうえ、ゴミのリサイクル率も向上させることができた。子どもたちも積極的に参加してくれたため、環境教育としての機能も果たせた。

フィリピンでは環境教育の機会が日本に比べて少ないため、こうした取り組みをもっと増やして環境面で我々の将来に好影響をもたらすことを認識させることが次の課題になると考える。また別のイベントでは、ペットボトルや古着、使いかけの文房具などを学校で集め、近くの公立小学校に寄付しに行った。ペットボトルは学校の先生がリサイクルショップに売り、換金して貧しい家庭の子供たちに配る。服や文房具が買えない家庭も非常に多いため、使いかけの物でもとても喜ばれた。留学前の私だったら「ゴミをあげるのは良くない」「心がこもっていない」という意見を持っていただろうが、実際現地へ行ってみると、使われなくなったものへの捉え方は、人それぞれ異なると感じた。そのため、現地に合わせた価値観を持つことはとても重要だと気付いた。

私は現地の価値観を大切に、自分も同じ価値観を持ちながら、問題改善方法を考えることを念頭におき活動が続けていた。この経験は、今までの自分の考え方を客観視できた良い機会となり、今後もっと新しいことを寛容に取り入れて、人々の役に立てる人間に成長していきたいと思う。